國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕飯沼清子著『源氏物語と漢世界』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 直巳, Yamada, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000413

〔書評〕

飯沼清子著『源氏物語と漢（から）世界』（新典社研究叢書302）

山田直巳

「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」（『土佐日記』）。買いかぶり、オーバーだと難じられようか、本著のアプローチは、この貫之の仮託・韜晦の志に似る。勿論そのアスペクトは異なるのだが、女の物語世界をその対偶たる男のありようをもって彫琢する。その槌と鑿とは、ごくオーソドックスだが、見えてきたものは、まさに本質を衝き、改めてそうであったと気付かせられる体のものであった。

さて、通常、多くの研究書の冒頭は、題目の由来をかたり、意図を述べ、目次の各条を少しずつ辿り述べて、当該著書の全貌を俯瞰・語ることをもって序章とする。しかるに飯沼氏は、「遊び心と志——序章」といきなり本題に入り、その「あとがき」に記されるように「本書の序章を「遊び心と志」と題した。自分の研究と生き方の理想を表明したものである。」とのマニフェスト。要するに、著者はこのように研究者として生きてきたのであり、こう生きていく他はない、との態度表明。実にユニークで、そのあり方においてまさに際立っていた。

冒頭序章は上の如くであるが、本著の末尾は「数寄の世界の「本歌」」の節で閉じられていた。つまり序章「遊び心と志」に始まり、「数寄の世界」で本著を了えている訳で、本著全体が「遊び心」と「数寄」に包まれていたのであり、「著者の立ち位置（standing location）」はこれによって明確であった。以上でも十分、批評の精神において一石を投じるものであったかと思われるが、その具体に入ってみよう。

目次（序章と全四章、全十八節。小見出しは省いた）。

遊び心と志——序章
一　「水」の今昔
二　末摘花と歳寒の松

一章　有識とモノ
一　「高名の帯」攷—宇津保物語に描かれた「帯」の意味

とその背景―
二　源氏物語の「帯」―宇津保物語との比較を通して―
三　「落冠」考
四　誕生・裳着・産養
二章　才と自律
一　平安時代中期における作文の実態―小野宮実資の批判を緒として―
二　「賢人右府」実資考―説話の源流と展開―
三　寛弘年間の道長と元白集
四　藤原道長の文殿
三章　漢的表現を追って
一　水石の風流
二　志の花―「蘭」の表現史―
三　狐と蘭菊
四　山の帝の贈りもの
四章　規範と規範を超えるもの
一　源氏物語の「さかし人」
二　「白物」攷
三　すずろなる時空―宇津保物語の史的背景―
四　数奇の世界の「本歌」

さて、従来の源氏物語（を初めとする中古物語）研究は、ややもすると光源氏など男主人公を軸とする男女の人間関係、葛藤が如何であるか等、また『蜻蛉日記』（中）冒頭の言忌みに「『三十日三十夜は我がもとに』といはむ」といった夜離（兼家の）を懼れる等といったテーマがしきりに問われたかに思われる。女の側からの「愛の渇き」、それに絡まる男女関係が如何に描かれるか、といった表現構造・文脈からの研究である。

しかし本著者飯沼氏は、右記目次の展開の中で、従来話題になってきたテーマがそれたり得ないと言っているわけではないが、藤原道長や藤原実資を代表とする男性貴族を含む男社会はどうであったのか、何をやっていたのか、そこに文化的営為はなかったのか、と疑問を呈しているのである。謂うまでもなく時代、社会、政治、軍事、経済を動かし、諸価値を中心軸において評価していたのは男たちであって、その存在を正確に把握する事は、平安時代を理解するうえで喫緊の課題であったはずである。それが山中裕氏等を中心とする方々の記録（『御堂関

白記』『小右記』『権記』など）研究の進展を見るまで、一般化できる状況にならなかったという側面もある。飯沼氏もまたその研究の一翼を荷った一人であるが、その具体的研究成果としてこの一本を手にすることができ、まことに慶賀にたえないところであった。

飯沼氏は「二章　才と自律」において、言う。「平安時代中期――長保・寛弘期が文学史上、とりわけ女流において空前の開花期であったことは言を俟たない。しかしながら同時期に活躍した男性の歌人・詩人たちの存在も見逃すことはできない。／筆者は『御堂関白記』等に記されている平安貴族の日常における文化的営為とともに、言語的世界の創造の背景に関心をいだくようになった。数多く存在する和歌、家集についても、より生活的観点からの検討を要すると思うと同時に、一方で男性貴族が駆使していた漢字漢文による表現のあり方についても考察の必要性を痛感している。道長、実資、行成らの日記に示されている、漢詩を作るという行為――作文（さくもん）に限定して記録を探ってみると、漢詩文に対する彼らの熱意と興味のもたらす結果について、批判的な眼が向けられてきたことも銘記すべきであろう。／いまわれわれが、そうした作文という文学的営為について視野を拡げて把握することは、物語文学や和歌をつくりあげている和文について考察する際にきわめて重要な視点であり、かつ文学史を考える上で新たな鍵を手にすることであると考えられる。これまで女流文学は、女の描いたものとして一面的に論じられる傾向が強かったが、このあたりで男性日記に記される世界を、より広く見わたし、その上で女性たちが自分の世界をいかに表現しようとしたかを考えるべきではないだろうか。」（本著pp.149-150）。

全く諾うべき提起で、このような発言ができるために著者がどれだけの情熱を傾けたか。それは十七頁にわたる「作文年表」（pp.168～）をみれば納得がいく。著者の随所に見られる博捜、調査魔ぶりは、本著を読む者に深い共感を呼ぶのであるが、「道長に贈られた書籍等」一覧（pp.216～）、「「かしこし」と「さかし」の分布状況」（pp.378～）等、また各論文に付けられた膨大な数の注釈とともに、論文たるもの是非かくありたいと自戒するところである。

雄編「高名の帯」攷」（本著pp.50～）には、道長と実資の葛藤が分析されるが、『小右記』の丁寧な読み込みと、論の絞込みにより、抵抗しつつ従う実資のありようが描かれて、実にリアルである。また「物の怪を見破る実資」（p.186）を参照すると、「賢人右府」実資の実力が、説話化というプロセスを通し、

知者という点を通り越して、不思議を可能とし、邪気を退けられるとなり、興味深いところである。

著者は、「三章　漢的表現を追って」で、「水石の風流」の節を立て、「他者の施した「水石風流」の地に足を運び心を慰め、往時を回想するという実資の行動の背景にあったのは、漢学の教養に支えられた知識人としての自覚であったと思われる。何よりも「寂然・徒然・草庵」等の言葉にそうした思考の一端がのぞいている。」（p.248）。「志の花――「蘭」の表現史――」の節では、「子規・漱石の俳句は、蘭が明治という時代まで確実に君子の心・文人の心を象徴するものと理解されていたことを物語る。それを育んできた土壌は、日本人の教養の根幹であった「漢詩漢文」の世界であった。」（p.286）と述べ、「古典」の命脈をいかに保ち続けさせていくべきか、我々に与えられた課題の大きさを思い知らされるのである。」と結んでいる。単に文学史の問題にとどまらないのである。

漢的世界とは、漢詩漢文の世界であり、中国文学的教養の世界とも繋がる。日本の記録という点では、『御堂関白記』を初めとする公家記録の世界である。そして、「一条朝文壇の隆盛を支える鍵を握っていたのは、道長の幅広い学問的関心であった。公任、行成、斉信、俊賢等「寛弘の四納言」は道長執政下の明るく自由な空気の中で活躍の場を広くしたと思われる。この点は女流文学との対峙において把握しなければならないし、また寛弘という時代を文学史上にどう位置づけるか、という大きな問題に繋がるものである」（p.215）と指摘する。

要するに、以上のような男の記録を中心とする「漢的」世界がなければ、女のかなの世界が花開く事はなかったのではないか、ということになる。

さて、本著を開くと、とても親しみやすい。紙の質、行詰め、天地、造本も関係しよう。それらの総合芸術として、書籍が存在することをしみじみ感ずる次第であった。是非皆様にご一読をお勧めするものである。

（A5判上製、四六五頁、新典社、二〇一八年五月発行、一三八〇〇円＋税）